

---

# 私、日本ちゃんになりました！！

春子

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私、日本ちゃんになりました！！

### 【Zマーク】

Z4305T

### 【作者名】

春子

### 【あらすじ】

突然、「あなたは養子です。あなたの本当の兄が今朝亡くなりました。あなたに次の『日本』を継いでもらいます。」と言われた少女【桜】とその仲間が繰り広げる学園物（の予定）。いまは、そんな風ひとつふかしていないけど・・・。

\* 6月12日 タイトル変更しました。。。

## 第一話 「私の日常」（前書き）

この作品はにょたにほを出すため、  
本家の日本は1話で死にます。

それでもいい方だけお進みください。。。

## 第1話 「私の日常」

「おはよー!」

「おはよう～ お母さん ・・・ おまけとして お父さんも  
「今 サリげなくひどくなかったか?」

「気のせいだよ～」

「なんか 娘の育て方間違ったかな・・・」

この会話から始まるのが私『鈴木 桜』の一日だ。  
しかし、いつも通りの朝を迎えたはずなのにあるニースが私の一  
日・・・いや運命を狂わせた。

@@@

私はくつとも通りへリビングのテレビをつけた。

『次のニースです。

今日午前4時ごろ東京タワーの前の木で首をつって死んでいる人  
が発見されました。

遺体は\*\*\*県\*\*\*市の「本田 菊さん」だとわかりました。

・

「・・・あれって もしや

「もしかしなくても、よ」

「何? お母さんたちの知り合い?」

「「うひうひうん! 何でもない何でもない!」

「 セツ？」

「 ほり！ そんなことより 学校遅刻するよー。」

「 まだ 半端なく余裕あるけど 「 セツー 早くこきなせー。」 ・・

・ はい。」

それが我が家でとつた最後の「朝食」になると  
その時の私には 知るよしもなかつた・・・。

## 第2話 「突然の真実」 1

『学校行くとき前の両親がおかしかった。』

それ以外は、何にもない【普通の日】だった。

登校中も S.H.R.のときも 授業中も 部活中も 下校中も・・・

「ただいま」

「・・・」

(おかしいな・・・。今日は一人とも早く帰つてくる日なのこ)

不思議に思いながら玄関で靴を脱ぎ、リビングへと向かつた。  
リビングにあるテーブルの上に母からだと思われるメモがあつた。

『今日、ママやパパの帰りは遅くなりますが、その後、桜の将来についての「重要な」お話があるので、眠らずに待つていてください。』

『ね

「重要な」のところに少し引っかかつたがそれ以外は【よくある】

メモだつた。

こんなメモ前にもあつた。だが、どうでもいいくだらない話だつた。また、くだらない話だつと思つたが、朝の件が気になつてそのまま待つた。

「「ただいま・・・」」

結局、両親が帰ってきたのは夜10時頃だった。

しかし桜は、そこが気になつたのではなく、彼らに元氣がないのが気になつた。

「おかげり。・・・どうしたの？元氣ないね」

「何でもないよ・・・。それより晩御飯食べよ。」

そういうわれて今日晩御飯お食べていいことに気づいた。

## 第2話 「突然の真実」1 (後書き)

短い・・・・!

でもこんな感じでいきます(笑)

### 第3話 「突然の真実 2」（前書き）

お初の感想がかなりうれしかった・・・！  
これからも短いながら頑張ります！！

てか この作品みたいな文章打つたの初めてです（笑

### 第3話 「突然の真実 2」

晩御飯は、母が作り置きしていたもので軽く済ませた。だが、私がその間つらかったのはそんなことではなく、『空気が重かつた。』ということだ。

【いつも】なら、いくら疲れていっても会話があつてにぎやかなのに…。

だが、その空気をぶち壊すために言葉を発する度の空気が私にはなかつた。

@@@

結局、会話がないまま食事は終わつた。

その後、私が震えるような声でがんばつて発したのは、

「ところで、私の将来についての「重要な」話って何?」

「・・・」

なんだ、返答がないじゃん…。

がんばつて声に出したのに結局その返答がこれなんか「あー」「…」…。

@@@

それからどれくらいたつてからだらうか。  
両親が話し始めたのは・・・。

「実はね・・・あなたは、養子なの。  
だから、血もつながっていないし、まったくの無関係。」

えつ・・・。何それ・・・。

桜は絶句した。戸惑った。

その様子を見て、両親はしばらく黙りこんだ後、口を開いた。

「黙つててごめんなさい。言いづらくて・・・。

だけど、私たちはあなたを実の娘だと思つて育ててきた。」

「ちょっと…ちょっと待つてよ…

なんで…だまつて…た…の…・?

やつとの思いでそれだけ伝え、涙をこらえながら返答を待つた。

「今まで、何度も言おうとしたんだけど・・・。

やつとの思いで築き上げたこの【普通】を壊したくなかった。  
だから・・・。」「

二人とも、涙をこらえてたらしくその先は聞こえなかつた。  
でも、その先は聞きたくなかった。

今聞いても、言い訳にしか聞こえなかつたと思つし、これ以上聞か  
されても情報整理できる自信がなかつた。

「一人とも・・・、ずるこよー。」

それだけ言って、私はリビングを飛び出し自分の部屋でベッドに倒れ、泣いていた。  
頭の片隅で、ある疑問を抱きながら・・・。

『両親はどうして今日、その話をする気になつたのだ？』  
もしかして、その先にもう一つ古い話があるのではないか・・・。

『

しかし、そんなことがあるだけ、もう今日は聞きたくなかった・・・。

### 第3話 「突然の真実 2」（後書き）

ほんと、私の小説短いですよね・・・。

## 第4話 「突然の真実 3」

気が付いたら朝になっていた。  
どうやらそのまま寝てしまつたらしい。

起きたが、しばらく「ぼお～」としていた。

昨日あんなことがあって両親に顔を合わせずらいのと、あんなことを言つてしまつた自分への懺悔で、どうしてもリビングのある一階に降りる気になれなかつた。

@@@

どれくらい時間が経つただろう。

ようやく、降りる決心がつき会談を1段1段降りた。

@@@

「お・・・おはよう・・・。」

「あらっー・おはよー、桜。」

「おはよー。」

一人は、昨日あんなことがなかつたかのように桜に接した。

昨日氣になつていたことを聞くなら今しかない、と決心したその時・

・

「「めん桜！ 起こすの忘れてた！」

「えっ！ やばい！ 遅刻じやん！」

お母さんがそう切り出さまで、時間なんて氣づかなかつた。

「朝<sup>あさ</sup>」はなんじうするー!?

「朝<sup>あさ</sup>」飯食べてる時間無<sup>なき</sup>から、購買で買<sup>い</sup>つー。行<sup>い</sup>ってきます!」

じゃあー。

行<sup>い</sup>ってきます!」

その日の朝、私は時間に少し感謝した。

聞<sup>き</sup>こ<sup>う</sup>と思<sup>ひ</sup>たが、実をい<sup>う</sup>と「怖か<sup>つ</sup>た」。

だから、聞<sup>き</sup>か<sup>ず</sup>に済<sup>す</sup>んだことに感謝した。

だが、そのことをすぐに悔やんだ。

@@@

その日、今朝聞きたかったことが頭を離れず、「ほお~」としていた。

授業・・・のままだと、点数落<sup>おち</sup>りがるよな・・・。

そんなことを思<sup>ひ</sup>ながらも、頭の中では【あの件】でこ<sup>こ</sup>ぱこ<sup>こ</sup>ぱいだつた。

それだけでも、桜にとつて精神的にくらかつた。

しかし、今1番つら<sup>い</sup>のは・・・

自分と自分の終わりなき戦<sup>たたか</sup>いを続けて<sup>いる</sup>自分の存在に気付<sup>く</sup>へー!と・・・。

@@@

桜にとつて、いつもと同じ時間でも、今日に限<sup>かぎ</sup>つては、その数倍、もしかしたら数百倍にでも感じられただろう。

そして、そんな待ちに待った、来てほしくて来てほしくなかつた時  
間になつた。

## 第4話 「突然の真実 3」（後書き）

はい・・・、途中からわけわからなくなくなりましたよね・・・。  
作者もわかつてません（笑）

感謝だじええええ！

読者の皆様

そして、アドバイスくれた同級のMさん

## 第5話 「突然の真実 4」（前書き）

今気が付いたんですけど、  
1番最後に始めたのに1番進んでいますね　　ダメじやん。。。  
ありがとうございます。

## 第5話 「突然の真実 4」

桜は、その日をがんばって乗り切り今、家の前にいる。正直に言つと、入りたくて 入りたくなかった。

「ただいま」

「おかえり」

なんと、両親は私より先に帰つてきていた。  
ちなみに今は、午後6時だ。

「桜、着替えておいで。昨日の話・・・続きがあるから・・・。」

空氣的にやつぱり悪い話だと思つた。  
あ・・・、やつぱりか。

だったら早くいって・・・！

そう思つた桜は、すぐさま皿室で着替え、コビングに戻つた。

@@@

「・・・で話つて何?」

「あなたが、養子だつて話はしたよね?」  
「うん・・・そこまで聞いたよ。」

お母さんはそのまま黙ってしまった。  
そのかわりに、お父さんが口を開いた。

「昨日の朝の一ニュース、覚えてるか？」

「えっと……たしか東京タワーの前で自殺があつたんだよね。」

「そう。」

「まさか、その人が私の本当の親？」

「……勘がいいね。でも、少し違う。」

「その人は、桜の本当の……兄だ。」

「ちょっと…ちょっと待ってよー。」

確かに私に関係があるのはわかつたけど…！」

「けど？」

「今、話すことではないよね？」

「……この先は、【彼ら】に任せたほうがいいかもね。」

彼らって誰？ と聞く前に、お父さんが入ってきてくださいと  
客間のほうに声をかけた。

その声には答えず、一人ほど入ってきた。

@@@

「 桜、紹介するよ。」 ひかりは、本田菊さんとの知り合いのえーと・・・

。

「 ルート・ヴィッヒ・バイルシュミットだ。」

「 ケセセセセ・・・俺様は、ギルベルト・バイルシュミットだ。」

「 ・・・どうも。鈴木 桜と申します。」

この二人と、一生つるむなんて、このとき、私は想像していなかつ  
た。

## 第5話 「突然の真実 4」（後書き）

やつと、本家の方が（菊以外で）でしたね！

ルートは最初持つてくることが決まっていたのですが、

書いている途中から、作者がギルの良さに目覚めてしまったんで（笑

作者自身腐っているので、この先

桜は、誰かとくつつくかもしない・・・。

そのこととは別の話ですが、来週から作者の学校では、テスト2週間前となるため、書きません。

ご理解とご協力を・・・。

## 第6話 「突然の真実 5」（前書き）

2週間かけないのが切ないので 今のうちに大量に書こうと・・・。

今日2話かけるかな・・・。

## 第6話 「突然の真実 5」

「では、お願いしていいかな・・・。」

「はい。でも、あまり聞かれたくない秘密事項があるので、桜にだけ話します。

よろしいですか?」

「では、さつきの密間を使つてください。」

「んじゃー早く行くか!」

「えつーつちよつちよつと待つて!」

そういわれ、ギルベルトさん(だつたはず・・・)に手を引かれた。

@@@

「改めて、はじめまして。 鈴木桜さん。 ルートヴィッヒ・バイルシユミットです。

みんなには、ルートと呼ばれています。」

「んで俺が、ギルベルト・バイルシユミットだ! みんなには、ギルとか、ギルベルトとか呼ばれている。」

「鈴木桜です。みんなには、桜つて呼ばれています。あと、敬語使わなくていいです。」

「そうか・・・。よろしくな、桜。」

「よろしくしてやる!」

その後、たわいもない話を十分くらい話した。

その時間が、私の悲しみと、緊張をかなりとつてくれた。

「あの・・・。質問が2つほどあるのですが・・・。」

「いいぞ。質問は短く簡潔にな。」

「一つめは、なぜ・・・。」

お二人の下の名前が一緒なのか?です。」

「あ~、その件か。それは、俺らが兄弟だからだよ。」

「えつ!」

「言ってなかつたか?俺様が、こいつの兄だよ。」

「で、俺が弟だ。」

なんか、イメージと違う・・・。

ギルさんがお兄さんで、ルートさんが弟さん?

「よく聞かれるよな。」

「で、最後あれ!?順番逆じやない?って聞かれる。」

「パターン化してるよな(笑)」

私がさつき思つたことは、他の人も考えてたんだ・・・。

「そういえば、もう一つの質問を聞いていなかつたな。」

「あつーそつこねば、言ってなかつたですよね?」

本当は、もう少し話を伸ばしたかった。  
だって次の質問は・・・。

## 第7話 「突然の真実 6」（前書き）

今日2話目ですよ。。

来週できないから。。

## 第7話 「突然の真実 6」

「では、一つ田の質問をさせていただきますね。

今回、私の兄が死んだことと、  
ただいま開催されている『大暴露大会』には、どんな関係がある  
のですか？」

「すごい答えずらいな・・・。だが、核心をついている。」

「まあ、聞かれなくとも、これからするつもりだつたしな。」

そこから、私には無関係のような話がかなり出てきていて、  
【真実】か【偽り】かわからないような話だったため、  
鮮明に覚えている。

@@@

だが、あまりに長かった。  
桜は自分用に持ってきていた飲み物を飲むのを忘れ、聞いていた。  
ルートの話を要約するところとなる。

@@@

桜の兄【本田 菊】や今日の前にいる自分たちは、国がそのまま、  
人になつた姿だという。

そして、【日本】として生きていた中、突然【本田 菊】は自殺を  
したため、

まだ、次の【日本】が決まつていなかつたといふ。

そんな中、次に【日本】が決めた器が【鈴木 桜】だつた。

@@@

「・・・といふことなんだが。」

「つまり、私に何をしろと?」

「次の日本になつてもらいたい。」

「はい?」

「次の日本になつてもらいたい。」

「ちよつと待つてください! そんな簡単になれるんですか?」

「【日本】が決めたことだし、そんなに難しくない。」

「俺らの時も、難しくなかつたしな。」

「それに、人間の時とほぼ同じ流れで生きていればいい。」

「ルートさん、今遠まわしで、人間じゃなくなるといいましたね。」

「だから、何度も言つてゐるだろ? 国になつてほしい、と。」

「・・・。」

「その件に関して、私に拒否権は?」

「そんなものない。」

「あつたら、俺らもここにいないしな(笑)

「・・・。」

「まあ、そういふことだ。」

「とりあえず、今日俺らは、このまま帰る。」

「そうだな。親子最後の1週間を邪魔したくないしな。  
来週、また来るわ。」

「それと、俺らのメアドだ。」

「何かあつたら、連絡してくれ。」

「ちょーさつきのビデオうこと・・・・・。」

「じゃあな。  
」

そういうって、二人は家を出た。

親子最後の1週間って?と聞けなかつた。

今回みたいに、後悔しなければいいけど・・・。

## 第8話 「突然の真実 7」（前書き）

昨日と同じですね・・・。

2話できるよつに頑張ります!!

## 第8話 「突然の真実」 7

桜は、二人が帰った後、自分の部屋で泣いていた。

人間ではなくなる・・・?  
では、何になる・・・?  
国になる・・・?  
わからない。

【真実】がどれだかわからない。  
もしかしたら、全部かもしれない。  
もしかしたら、全部嘘かもしれない。  
なんで なんで なんで なんで なんで なんで  
【答え】はどれなのだろう・・・。  
なんで なんで なんで なんで なんで なんで  
そんなことを考えながら・・・。

@@@

気が付いたら、朝だつた。

おとといと同じように、泣きながら寝てしまった。  
しかし、昨日は、寝たのが早かつたらしく、起きる時間も早かつた。  
桜は、時間を見た後シャワーだけでも!と  
お風呂場へ向かった。

@@@

「おはよう。お母さん、お父さ・・・？」

いつも通りいると思ったが、いなかつた。  
しかし桜は、昨日ほど驚かなかつた。

またか・・・。まあ、慣れたからいいけど・・・。

しかし、【二つのパターン】だつたらあるメモ書きをと  
作った朝<sup>あさ</sup>はんがあるはずだが、今日はなかつた。

「・・・めんどくさいこ、近くのコンビニで買つか。」

そうこうして、自室でお金を数え、あとで、今日の分をもりおひとい  
心に決めた。

@@@

学校に行く準備をした後、そのまま出かけた。  
そのまま、近くのコンビニに行き、おにぎりを3個買った。  
その後、学校に行って、クラスの人来る前に、すべて食べてしま  
おうとした。

が、そのあとすぐに桜の幼馴染の【優斗】が来た。

「がらんー。」

「おはよう・・・、あれっ！ 桜ちゃん！ 珍し・・・てか、何食つて  
んの？」

「おはよう、優斗。それと、一度に全部聞かれてもわからないから。

」

「質問は一つだけじゃん。」

「確かに（笑）。じゃあ、質問に答えると、朝<sup>あさ</sup>はん。」

「そつちかよ・・・。違つよ。桜は何を食べているかってこと。」

「見たまんま、おにぎりだよ。おにぎり差し出しながら、これは塩

じやけです、とは言いません。」

「じゃあ、もう一つ質問しますけど、具は何ですか?」

「何つて、お米と、海苔と、水と「むつい」です・・・。」 いい

の?」

「ここよ・・・。」 もうつからー!」

「もううんだつたら、金返せ! 一千円! 今すぐ!」

「いやだよ〜〜〜だ!」

「・・・この「自主規制」が服を着て歩いているような物体のくせに生意氣だ〜〜〜!!」

「うわ! 朝っぱらから自主規制がかかるよ! こんな言葉使はな〜〜!」

～10分後～

その後も桜は、自主規制がかかる言葉を大量に吐き出した。

「はあつ・・・はあつ・・・はあつ・・・」

「お互い疲れているみたいだし、やめつか!」

「お前が、おにぎり返してくれるならな・・・。」

「もういいよ! 桜が食べているの邪魔したがつただk (殴

ぐがらん...)」

「おっはよう! 朝からお一人さん、アツアツですな〜〜。」

「!! そんなんじやないからな!」

別に、焦っている桜が見たかったんじゃないからな!」

((シンデレーラ))

(奥様、知つてますわよ。あの子、十年近く桜さんに片思いなんで

すつて！）

（まあ！本当に！？優斗君も大人の階段のぼってしまいましたね～！）

等々、かなり心中では、苛め抜かれている優斗たん。  
そんなの知らんぷりで、おにぎりの続きを食べる桜たん。

二人とも、そんな中朝のＳＨＲの時間を迎えた。

## 第8話 「突然の真実」7（後書き）

途中、桜たんのお風呂関連は、白瀟しました。  
これ以上やると、作者の個人的な趣味になってしまつか？」（殴

## 第9話 「知られた残酷な運命 1」（前書き）

サブタイで残酷とか言っていますけど、  
そつちの残酷では無く、じつちの残酷です。

とこつわけで、残酷な描寫ありにはしません（笑）

## 第9話 「知られた残酷な運命」 1

「がらん。」

「みんな、おはよ。」

「「「先生、おはよ。」」」

先生が入ってきて、教壇に立つた。

「さて、残念なお知らせがある。」

【鈴木 桜】が、今日から【本田 桜】になること、そして、

今週の土曜・・・、つまり明後日転校する」とが決まった。」

「えつ・・・・・。」

桜は、動揺を隠せず思わず立ってしまった。

「なんだ・・・・お前聞いていなかつたのか?」

「聞いてないどこの問題じゃないですよ!」

「でも、そういうことだ。たしか転校先は・・・『W学園』だったかな。」

「・・・。」

キーンローンカーンローン

「それじゃあ、残りの間、みんなと仲良くな。」

@@@@@

何それ？

お兄ちゃん、私をビームで苦しめれば気が済むんですか？  
ビーム、こんな仕打ちを受けなくてはいけないのですか？

桜は、そんなことを考えていた。が、その時間は長くはなかつた。  
なぜかと云ふと・・・

「桜！…」

「えっ！… 優斗、ビームしたの！？」

「どうしたもビームしたもねえよ！」

「なんでそう云う」と早くいってくれないんだよ！

「だつて、私だつて今初めて聞いたんだよ！」

それを、早くなんてどうやつたら言えるの！」

「それは！…」

「もう！私の気も知らないで！ 優斗なんでもう知らない！..

「！… あ～そつかよ！ だつたら、云うの」と云ひ出しながら

「何よ！ 先に突っ込んできたのはそっちでしょ！」

そうこうたら、優斗は自分の席に戻ってしまった。

あ・・・。また、本氣で怒っちゃった・・・。

もう優斗には本氣で怒らないって決めていたのに・・・。

@@@@@

12年前・・・

「ねえ優斗！ 早く遊びに行こうよ。」

「もうちょっとで終わるから。」

「一緒に遊びに行ってきましたのはそつちでしょー。」

「だつて、もう少し後に来ると思つていたんだもん。」

「だもん、じゃないでしょ！ だもん、じゃ！」

「つるさいなー。もう少し静かにしてよー。」

「そつちが急いでくれればこんな大声出さないわよー。」

そつこいつと、優斗の頬が膨らんだ。  
よく見ると泣いていた。

「あっ！ 『じめん・・・。』」

「もつ桜なんか知らない！」

そつこいつで家を飛び出した優斗は、前を見ていなかつた。

「何よ・・・、優斗なんて・・・！」

＜ガシャン！＞

え・・・。

なんかあつたのかな。

外では、キヤー——という叫び声も聞こえた。

そんな中、「優斗、しつかりして！」「という声が聞こえた。

桜は、あわてて外へ飛び出した。

そこには、車にひかれた優斗がいた。

「優斗……」

「ごめんなさい！私がみんなに怒らなければ！」

それから少し経つたら、遊べるほど元気になった。  
幸いにも、傷が軽傷だったため、すぐ退院できた。

が、その後しばらく彼の両親が彼を外に出すのを許さなかった。  
それ以上に桜自身も精神的に傷ついていたため、外に出なかつた。

@@@

その時だった、優斗への懲悔でつまく接することができなくなつた  
のは・・・

## 第9話 「知られた残酷な運命 1」（後書き）

ちょっと桜たんの過去も書いてみました。

優斗との接し方が昔ほどまくないのにはこんな理由が・・・

（作者が納得）

まあ、それは置いておいて、次は多分、今まで出てきたキャラの紹介かと・・・。

## キャラクター 紹介（前書き）

前回の予定通り、キャラ紹介で・・・

桜たんの外見とか、年齢（殴

等々・・・。

## キャラクター 紹介

\* 本田（鈴木） 桜\*

- ・年齢 : 17歳（高2）
- ・血液型 : O型
- ・誕生日 : 12月3日
- ・身長 : 156cm
- ・体重 : （本人の希望により載せません。）

しかし、決まっているので知りたい人は感想で言ってください）

- ・部活 : 考古学部
- ・外見 : 髪は、黒髪でストレート（腰あたりまで）  
スタイルはいい。 が、（本人として自肅）は小さい。  
顔的にもてる。
- ・性格 : 初対面だったり、あんまり話したことない人には性格  
はいい。
- ・備考 : 憧れている人には容赦なし。 つまり、猫かぶり。  
自己規制な言葉も結構使う。  
かなりもてる。
- ・ : てか、かなり秘密裏にだが、ファンクラブがある。  
が、本人はそんなの気にせず・・・。  
ラブレターとかは、よくもううが読まずに捨てる派・・・。

その前に、恋愛関係興味ない

（それでいいのか、青春時代・・・）

あと、かなり食い意地張っている。

1食分が半端ない・・・。

\* 本田 菊\*

- ・ 享年 : 27歳(の設定)・・・
- ・ 血液型 : O型
- ・ 誕生日 : 2月11日
- ・ 身長 : 165cm
- ・ 外見 : ご本家と同じ
- ・ 備考 : 【日本】の重みに耐えきれず自殺。

桜のことは、かなり気に入っていて、「それ、ストーカー行為」

的なこともかなりやっている。つまり、シスコン。  
あとは、ご本家と同じ。

\* 篠宮 優斗\*

- ・ 年齢 : 17歳
- ・ 血液型 : A型
- ・ 誕生日 : 1月12日
- ・ 身長 : 174cm
- ・ 体重 : 57kg
- ・ 部活 : サッカー部
- ・ 外見 : 髪は普通に黒髪でちょうどいい長さ  
顔はかなりのイケメンさん(笑)
- ・ 性格 : 桜と同じく猫かぶりというか外面だけいいというか・・・

でも規制がかかるような言葉は使わない。

本来だつたらモテモテだが、好きな人がいるのは  
学校中に知れ渡っているため、ほとんどの生徒があき  
らめている。

が、たまに呼び出しへらう・・・

桜とは3歳ぐらいからの付き合い。

## キャラクター 紹介（後書き）

的な感じですわ・・・。

他にも紹介してほしいキャラなどはどんどん書いてください――!  
すぐにはできないけど、あとめて後で・・・

## 第10話 「知られた残酷な運命 2」（前書き）

あよ'は、学校行く前に1話とあとは、学校で考えます。

だから、3、4話いけたらいいなあああああ、と・・・

## 第10話 「知らされた残酷な運命 2」

その日の私のクラスは、空気が重かつた。理由は、朝やつてしまつた優斗と桜の喧嘩。

あの後一人は、かなりの勢いでどす黒いオーラを出していた。

クラスでの件を知らない、「くわづかな人は何事かと、クラスでの件を知っている大勢の人は早く仲直りしてくれないかと、思っていた。

その日の桜・・・

「ねえ、あやな桜！」  
「何？」  
「彩菜・・・。」

宮間みやま彩菜あやなだ。

そう、今声をかけてきたのは高校入学当初からの親友。今まで、二人が喧嘩した際の仲介人的存在だつたが、しかし、今回に関しては桜を説得しようとしていた。理由は、今回現況を作つたのは桜だし、

今、ある人に優斗の説得をしてもらつてているからだ。

「何も優斗君だけが悪いわけじゃないでしょ～。」

「じゃあ、私も悪かつたつていうの？」

「そこまでは言わないけど、優斗君の気持ち、わからなくもないでしょ～！」

「たしかに、今まで言わなかつたつて他の人は思うだろうけど、本当に今回知らなかつたんだもん。家庭内での問題で頭がいっぱいだつたし・・・。」

「? 何それ・・・? 私には話せないこと?」

「・・・聞いても後悔しなくなっちゃうナビ~。」

「じゃあ、話して。」

「・・・。」

@@@

それから、この数日の間起つたことをすべて話した。

養子の件、本当の兄の自殺の件、ルートさん達が話してくれた国のこと

話・・・。

彩菜は、息をのんだ。

「どう? 私的にはかなりつらかったんだけど・・・。」

「ありがとう・・・。」

そつか、だからこの頃授業中とかまおーとしてたんだ。」

「やっぱ。でも、どうにも転校の話なんて出てこなかつたよ・・・。」

「出しちゃえば?」

「えつ!」

「家に帰つたら、その・・・ルートさん? 達にメールで聞いてみれば?」

「あ~!そつか!その手があつた!」

「でしょ~!」

「ありがと!」

キーンローンカーンローン

「まひ! 授業始まるよー!」

「つさー!」



## 第10話 「知られた残酷な運命 2」（後書き）

すいません！

時間的にここまで切れます！！

そして、誤字がかなり多かったので訂正しました。  
誤字があったら、感想で言ってください

## 第11話 「知らされた残酷な運命 3」

その日の優斗・・・

桜と違い、かなり荒れていた。

そんな優斗が怖いため、説得に立ち上がつたものがいた。

「なあ、優斗・・・。」

「あ〜？ なんか用か？」

「いい加減機嫌なおせよ〜（泣」

「そんなの関係ないだろ・・・。」

「そりや、たしかにお前の気持ちもわかるけどや〜。」

「・・・。」

「桜さんの気持ちも考えろよ〜。」

「あ〜〜！ もういい加減にしろよ、竜大！」

そう、説得に立ち上がつたのは 間宮竜大。まみやりゅうだい

高校入学当初からの親友で、サッカー部のエース。

ちなみに、桜の説得にあたつている彩菜の双子の弟だ。

「・・・お前だつてもうわかつてるんだる？」

桜さんのさつきの態度で、く知らなかつたつていうのは本当な

んだつて・・・。」

「・・・わかってる。」

「だつたら、さつさと謝つてこいや。」

『さつきは言ひすぎました。』『めんなさい。』つて・・・。

『それじゃあ、逆に桜の機嫌を損ねるだけだから・・・。』  
「よく知つてるな・・・。」

「そりゃあ、三歳の頃から知ってるからな・・・。

でも、【他人】だから、お前等みたいに生まれた時から知ってる

わけじゃない。」

「それいつたらおしまいだら・・・。」

「・・・。」

「（やつからのだんまりが悲しいほど怖いな）でもさ、どうちこ  
しろあと3日だろ？」

「だったら、仲直りして別れたほうが絶対得だつてー。」「

「でも、今日する気にはなれない・・・。」

「何も今日とは言つてないだろ？」

「明日だつて（きつぎりだけど）明後日だつてあるだり?」

「言つとしても明後日になると思つ・・・。」

「そつか・・・まあ、がんばれー。」

「ああ。」

## キーンコーンカー「ーン

「ほら、席に戻れよ。チャイムなつてるだろ?」

「ああ。だけど、必ずしろよー。」

「・・・。」

「・・・。」

優斗は、何を考えているのだろう。

謝るにしたつて早いほうが多いと想つのに、このやつの明後日謝る  
とは・・・。

まあ、奴のことだから何か考えているのだろうけどな・・・。

第12話 「知らされた残酷な運命」 4 (前書き)

昨日 ノルマ達成ならず・・・。

まあ、今日がんばるぞー。

## 第1-2話 「知らされた残酷な運命 4

桜は、授業が早く終わることを期待していた。  
なぜなら、【今回の件】についてルートたちに早く聞きたかったからだ。

こんな話聞いてない！

さて、「ああ、言い忘れてた！」なんて言つたら、  
どうして差し上げましょうか・・・（黒笑）  
ハツ切り？ 微塵切り？ 閣討ち？ それとも素直に真つ一つ？  
・・・なんてことを考えていながら。

@@@

やつと待ちに待つた放課後。

桜は、部活のメンバーを適当にひっくめて部活をせずに帰った。  
帰るとき、優斗のそばをわざと通り、  
「また、明日ね・・・」と小声で言つた。  
優斗は、無視をしたけど、そのまま喧嘩にもつてこないでしまっこう  
だからそのまま帰った。

@@@

学校を出たらいすゞへダッシュで家に向かつた。

「ただいまーー！」

「お、おかえり・・・。」

「どうやった、すうご顔で帰つてしまつたらしく、両親がやや引きました。

まあ、話す時間がもつたいないし、そのまま自室に行つた。

@@@

部屋に入るなり、制服のままベッドに飛び込み、メールを打ち始めた。

文面はこうだ。

\* \* \*

「こんにちは、ルートさん。　本田桜です。

今日は、少し腹が立つてるので、早速本題に入らせていただきます。

本題つて？　と思ひでしうね。

本題とは転校の話です！　私聞いてませんよー。

そのせいで幼馴染とは喧嘩するし、もう今日はサイテーですよー。

その他に、いろいろ聞きたいことがあるので  
即急にメールください！

\* \* \*

本来はこんなメールではなく律儀な手紙風なメールなのだが今日だ

けは別だ。

まあ、「即急に」って打ったし、すぐに返信が来るでしょう。

@@@

結局、返信が来たのは10分後のことだった。

第12話 「知られた残酷な運命」4（後書き）

最初のほうに出てきた殺し方はこのあいだ作者が妹に言つた言葉です（笑）

てか、今回区切多ー！

第1-3話 「知られた残酷な運命」5（前書き）

本田一話田一

## 第13話 「知られた残酷な運命 5」

桜はおむすぶメールを開けた。

\*\*\*

遅くなつてすまない。

転校の件は俺も今さつき聞いた。  
実をいうと、勝手に学園側が決めてしまってこっちにまだ連絡すら来ていない。

兄さんも正確なところまで知らなかつたらしい。

これは余談だが、

実は俺らが帰るときに兄さんが言つていた「親子最後の1週間」は、  
俺や兄さんが【国】になるときと同じならそつだうな、という確  
信のない話だつたらしい。

あと、俺らも学園に行つている。  
学園に入るとその後、今いふことに必ず言つていいくほど戻れないから、  
今のうちにやりたいこと、したいことやっておけ。

学園での生活とかは聞いてくれ。

学園での生活は、俺も兄さんも長いからな・・・。

では、また連絡する。

## ルートヴィッヒ・バイルシュミット

\* \* \*

・・・。

ルートさんだつたら知つてゐと思つたのに・・・。

その後、桜の脳裏にはある人物の名前が浮かんだ。

優斗・・・！

やだよ・・・。

優斗と離れたくないよ・・・。

まだ一緒にいたいよ・・・。

会いたいよ・・・。

そこまで思つてやつと氣づいた自分のおもい気持

せつかく、氣づいた自分の気持ちを伝えられずに、離れたくないよ・・・。

優斗・・・。

私やつとわかつた・・・。

優斗のことが好きなんだって・・・。

## 第13話 「知らされた残酷な運命」5（後書き）

なんか、人間関係半端なくぐじょぐじょだ〜〜（泣

まあ、作者の人生自体人間関係ぐじょぐじょなんだけどね・・・。

第14話 「知られた残酷な運命」6（前書き）

桜は、自分の気持ちを素直に伝えられるのか…？

その日は、そのまま寝てしまつた。

@  
@  
@

次の日、桜は早く起きた。

「おせむる。」

おはよう

今田は、二人とも居た。

「朝ごはん、どうする?」  
「今日は、学校に早くいきたいからいいらない。」  
「そつか。じゃあ、おにぎりにする?」  
「お願い。ちなみにいつもと同じ量お願いね。」  
「了解。」

「なんだ? 桜が朝ご飯食べないなんてめずらしいな。」「まあね。でも、最近は多かつたよ? 誰かさんたちのせいだ。」「すいません。」

「ねえ、眞面目な話していい?」「・・・転校の話か?」「なんでわかつたの?」

「・・・。お前何年俺らが育てたと思つてるんだ?」

「・・・15年。」

「正解。ちなみにそれまではお兄さんが育ってくれてたみたいだぞ(笑)」

「そうなの?」

「って言つてた。」

「本題入つていい?」

「いいぞ。」

「知つてゐるの? 転校先がどんなところか。」

「ああ。」

「じゃあ、なんで転校させる氣になつたの?」

【日本】になるんだろう?

そうなると、暗殺の可能性が高くなる。  
だから、桜を安全なところへ、と思つたからだ。

「・・・。」

「やつこつこじだ。」

「ほり、今日は早くいきたいんじゃなかつたの?」

「うん。」

「荷物、私たちが勝手に片づけていい?」

「うん。」

「じゃあ、行つてきます。」

「こつてらつしゃー。」

このとき私は、私が養父たちと話す最後のチャンスだったとは思わなかつた。

学校には、昨日より10分ぐらい遅れて着いた。  
といつても予鈴が鳴るまでは、かなり時間があった。

「おはよう。」

誰かいることを期待して、桜は挨拶をした。  
が、誰もいなかつたので誰も返してくれなかつた。

## 第1-4話 「知らされた残酷な運命」 6 （後書き）

中途半端ですよね～（笑）

この後、1・2話で第1章終わりです。

## 第15話 「知らされた残酷な運命」 7

しばらくたつと、みんな来た。

が、予鈴が鳴つても優斗が来なかつた。

優斗、遅いな・・・。

@@@

がらん！

「みんな、おはよう。」

「「「おはよーい」やります。」「」

「えへ、今日の田直は+++だ。

欠席は、篠宮 優斗だ。」

え・・・。

桜は、気が付いたら立っていた。

「どうした、本田？」

「あっ！ いえ、何でもありません！」

気が付いた桜は、湯気が出そうなほど赤くなつていた。

しまつた・・・。

優斗が休みつて聞いてつい立つてしまつた。

今日、帰る前に様子見に行こうかな？

「それと、本田。」

「・・・。」

「本田?」

「・・・。」

「本田 桜さん?」

「・・・。」

「桜!」

「へい!」

桜は、いきなり呼ばれて声が裏返つてしまつた。  
クラスのあちらこちらから笑い声が聞こえる。

うわ～～ん！ 恥ずかしいよ～～！

「苗字が変わつたばかりで気づかなかつたのか？」

まあ、それはいいとして。お前宛に荷物が届いているから早く  
事務室行けよ？」

「？はい・・・。」

荷物・・・？

転校の書類かな？

キーン」「ーンカーン」「ーン

「じゃあ、HR終わるだ。」

級長の合図で全員で礼をした。

@@@

H.R.が終わった後、事務室へ向かつた。

「失礼します。鈴・・・本田 桜です。」

事務室に居たのは、事務員の後藤さん（69）だ。  
学校では、結構評判のいい事務員の人だ。

「ああ、待つてたよ。」

さつき、なんかこれとこの手紙を桜に渡してくれつて泣きながら  
言われてな。

どこのだれか聞いたら、何も言わず走つて行っちゃつてよ～。」

そつと渡されたのは、

私の旅行用の大きい鞄と手紙だった。

旅行用の鞄には、私の着替えやドライヤー、靴などこれさえあれば  
生活できるようになつていた。

桜は次に、手紙を読んだ。

\*\*\*

桜へ

別れるのがつらくて、いつも手紙だけを置いていく私たちを許して  
ください。

この15年間、いろいろあって楽しかったね。  
学園に行つても、私たちのこと忘れないでね。

多分、あなたがこの手紙を読んでいることは私たちは、飛行機の

中です。

今日は、優斗君の家に泊まれるよくなっています。

わゆつなら、元氣でね。

\* \* + + より

\* \* \*

それは紛れもなく、養父たちのものだった。

え、嘘・・・。

私、もしかして捨てられた・・・?

嫌だよ・・・。  
なんで・・・。

お兄ちゃん、嘘だよね?

なんでこんなに私から幸せを奪うの?

なんでこんなに私から自由を奪いつの?

なんで・・・。

気が付いたら、私は泣いていた。

第15話 「知られた残酷な運命」 7（後書き）

もしかしたら、あと1話で終わんないかも・・・。

## 第16話 「知らされた残酷な運命」 8

その日は・・・いやその日もとこつていいくらいだ。  
その日も桜は、授業中ぼおつとしていた。

「では、この問題を本田。」

「・・・。」

「本田？」

「・・・。」

「本田？」

先生が呼んでいる声なんて私の耳には入っていなかった。  
だって、今の私は・・・。

「桜、先生に呼ばれてるよ！」

と、と隣の彩菜が教えてくれてやつと気が付いた。

「はいっ！」

「どうした？ 本田、ぼおつとして。」

「いえ、なんでも・・・ありません。」

「まあいい。では、この問題解いてくれ。」

「はい・・・。」

その問題が簡単で助かつた。

実をいふと、予習も何もやつていなく、  
難しかつたら、先生からお叱りを受けるところだった。  
まあ、この先生はそこまで怒らないけど・・・。

@@@

結局、その後先生にあてられることなく終わった。

下校中、ふと考えたらその道は今までの家への通学路だった。

ああ、今までの家はもう私が帰る家じゃないのか・・・。

そう感じた途端、涙が止まらなくなつた。

道を歩く人がどんな目で見ようと涙は収まらなかつた。

そのまま、声を上げた。

道の端で泣いているので、近くを歩く人が避けようと、より変な目で見られようが関係ない。

私は、ずっとその場で立ちながら泣いていた。

@@@

うわさを聞いてやつてきた優斗の両親は、  
「大丈夫だよ。」とか、「がんばつて。」と言つていた。

がんばるってなんだろう?

大丈夫って何が大丈夫なのだろう?  
なんで、大丈夫なのだろう?

その時私は、今までのこともあり卑屈になつていた。

そんな私でも、迎えに来てくれたのは、

あつたかい人だつた。

@@@

「「ただいま。」」  
「お邪魔します。」

私は、本当に優斗の家に泊まることになつていたらしく。  
養父たちの言葉を信じていなかつたわけではなく、  
もう何が**真実**なのか分からなかつたからだ。

「あ・・・。もう来たんだ。」「  
もう来たんだ、じゃないだろ?」「  
でも・・・。」「

そこへ、優斗が来た。

あれ? なんで優斗元気なの?  
今日、学校休んだじやん・・・?

「今日は、明日の準備で休んだだけ。」「

「なんで、心の中呼んでるの?」

その前に、明日って何かあつたっけ?「

「まあ、詳しい話は明日・・・。」「

「明日かよ!」「

「まあまあ、桜ちゃん。

まず、晩御飯食べようか。」「

「はい。」「

優斗の家での晩御飯は、この『ぐりできなかつたある意味理想的な晩御飯だつた。

「」馳走様でした。おばさんの「」飯、おこしかつたですー。」

「ありがとう。よかつたわ、お口こありますか。」

「それと、桜ちゃん。」

今から、部屋に案内するね。」

「何から何まで、ありがとうございます。」

「つづん、大丈夫だよ。」

それにもう、これぐらこしかできなこからね。」

「いえ。こままでたくさんのことをしてもらつてますから。」

「そうだ！ねえねえ桜ちゃん。」れ、あげるね。」

そうこつて渡されたのは小さなチャームの付いたネックレスだった。

「これね、おばさんが作ったの。」

「おばさんか？」

「そう。ちゅうじ櫻ちゃんにぴったりだと思つわ。  
もし小つちやくなつたらネックレスのひもを短くしてキーホルダ  
ーにしてね。」

「ありがとうございます。大切にします。」

そうこつて、リビングを出た。

## 第16話 「知られた残酷な運命 8」（後書き）

途中、優斗のキャラが違うのは気にしないで・・・。  
もひ、頭の中が大変なことになってるから・・・。

## 第17話 「知らされた残酷な運命 9」

私が通してもらつた部屋は、私一人で使つことは少し広い部屋だった。

「今日も、いろいろあって大変だつただろうから早くお休み。

あと、お風呂入りたいときはリビングに僕たちがいると思つから  
一声かけてね。」

「はい。ありがとうございました。」

「じゃあ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

そういつて、おじさんは、部屋を出た。  
もう、疲れた・・・。

そう思い、敷いてもらつた布団に横になつた。  
そのまま、桜は眠りについた。

@@@

「おはよび『やれこ』ます。」

「おはよう、桜ちゃん。夜はよく眠れた?」

「はい! ぐっすりです!」

「それはよかつた。」

「そういえば、優斗は・・・?」

「ああ、あいつ今日朝練無いから少し遅いよ。」

「そなんですか?」

「でも、朝ごはんができるひまは起きてくれないよ。」

「そうですか・・・。」

あの、昨日寝くて寝てしまつてお風呂入つていないんでシャワー  
だけでも借りていいいですか？」

「ああ。もちろんこゝよ。」

そうして、私はお風呂に通してもらひた。

その後、シャワーを浴びて、ちょうどいいからと制服に着替えた。  
リビングに向かうと朝ごはんができていた。

そこには、おじさん、おばさん、そして制服姿の優斗がいた。

「遅い。」

「悪かつたですね。遅くて。」

「まあまあ、一人とも。早く食べよ。」

「いただきます。」

そうして私は、【日本】で最後の食事をとつた。

@@@

今日は、ちゅうと用があるところ優斗に付き合つて、少し早めに出  
た。

そうして向かつた先は、学校だった。

「ちゅうと優斗！ 学校に用があるの？」

「そうじゃないよー。」

しかも、学校って言つても、体育館の裏だよー。」

「なんでそんなところに？」

そんな話をしながら体育館裏についた。

「桜、今日桜が学校にいるの半日だし、あとからだと言えないから今言つよ。」

桜、今まで好きだつたんだ！」

え・・・。

これは、まさかのドッキリですか？

「『めん・・・。今まで言えなくて。

でも、転校する前に言いたかつたんだ。

ちなみにこれ、嘘でもドッキリでもないから（笑）

ドッキリでもないらしい・・・。

じゃあ、これはほんとうの告白？

やだ・・・。泣きそう。

でもこれって、私の気持ちをいつチャンス？

「私がらも、一言いい？」

「いいよ。」

「私も小さじろから好きだつたの……」

「……」

「ちなみに嘘じゃないからねー。」

「ありがとう！」

あと・・・これ。」

そういうて差し出されたのは、すぐかわいいキー ホルダーだった。

「お袋みたいに、アクセサリーとも思つたんだけど  
アクセサリーっていつも身に着けていられるものじゃないだろ？  
だから・・・。」

「ありがとう！ 大切にするね！」

「うん！

もうそろそろ行かないと怪しまれるから行こうか・・・。」

「だね！」

「じこまでは元気だったもののやはり泣いてしまった。

「泣くなよ！」

「だつて、これが優斗と一緒に話す最後なんだと思つたら・・・。」

「ばかだなあ～ 桜は。

直接話せるのは最後かもしれないけど、メールだつて電話だつて  
あるだろ？？」

「だつて～～～。」

「もう、桜は・・・。」

そこまで言つて優斗は、私の涙を指で拭ってくれた。

ありがとう優斗・・・。  
私・・・新しいところで頑張るからーー！

## 第17話 「知らされた残酷な運命」9（後書き）

なんか・・・優斗が毎回キャラ違ひよつた気がする・・・。

私、オリキャラ下手ですね(笑)

そして、プロローグ完結！

かなり中途半端な気もするけど・・・。

第1章もこいつに期待！！

## 第1-8話 「私の新しい生活 1」（前書き）

他の方に言われて初めて気が付いたこと

菊殺したけど

台灣とか、トルコとかどうやって出すんだろう・・・。  
そこまで考えていなかつた（笑）

ちなみに今日は学校の創立記念日だから休みてなわけで、鬼の居ぬ間に投稿・・・。（笑）

## 第1-8話 「私の新しい生活 1」

その日、私は暇さえあれば優斗と話していた。  
話すたびに湧き上がる涙をべつとじらぬながら・・・。

最後の授業はHRだつた。

クラスメートの皆が、秘かに先生にお願いしてHRにしてもらひ、「  
桜の送別会をした。

桜は、優斗が昨日休んでいた理由は送別会の準備だと聞いてびっくり  
りした。

送別会ではゲームをして、楽しんだ。

が、最後のほうになつてみんなからひと言ずつメッセージをもらい、  
桜は涙腺が壊せるほど泣いた。

みんなからのプレゼントとして真ん中に空白を残して寄せ書きをし  
た【色紙】をもらつた。

秘かに隣にいる優斗に聞いた。

「なんだ、真ん中が空こうの?」「  
決まつてんじゃん!」

そこへ今日の写真を張るためによ!

その後、先生がクラス写真を撮ってくれ、

大急ぎでプリントし【色紙】の真ん中に張つた。

学校の校門でルートとギルベルトが車の前で待っていた。

校門の前までみんなが付いてくれた。

そんなみんなに振り向いて桜は笑顔で言った。

「みんな、ありがとう…！」

そう言つて桜は一人の元へ歩いて行つた。

「…もういいのか？」

「もう会えなくなるんだぞ？」

「大丈夫です！」

「そうか…。」「

そういつて三人は車に乗り込んだ…。

さよなら、私の田嶋…。  
さよなら、優斗…。

第19話 「私の新しい生活」2（前書き）

とてもお待たせしました！！

(誰も待つてね——y)(一殴)

## 第19話 「私の新しい生活 2」

それから、十分ぐらい桜たちは黙っていた。  
だが、壁の空気は苦しいと想っていた。  
そんな中・・・。

「・・・あ。」

ギルがやっと口を開いた。

「どうしたんですか?」

「そういえば、【国】については話したけど俺がどうの【国】か  
伝えてなくね?」

「あつ・・・・。」

「そういえばそうだな。」

「どう?」

「というかこの場合、自己紹介もすぐ簡単にしかしないから  
そつちもしたほうがいいんじゃないかな?」

「確かにな・・・・。」

「それじゃ、俺様から!」

ギルベルト・バイルシュミットだ。

プロジェクト【国】でもある。」

「(自己紹介つてこっちもすごく簡単・・・・。)

あの・・・・。プロジェクトかなり前に滅んだのでは?」

「ああ。だが、こつして存在する。

「俺様が俺様でいられるんだったらい、【国】だらうが構わない。」

「・・・・。」

『俺様が俺様でいられるんだつたら、【亡國】だろうが構わない。』

その言葉は、ギル本人の本音であり、これから会うであろうほかの国や兄が思っていることではないか？  
そんなことを桜は思った。

「次は俺だな。

ルートヴィッヒ・バイルシュミットだ。  
俺はドイツだ。』

「ドイツ・・・

聞くことはよくあるナビ行つたことないです。』

「じゃあ、今度来るといい。

案内だつたら、いつでもやるからな。』

「ありがとついでここまでーーー！」

その後、学園につくまで3人はたわいもない話をしていた。

## 第1-9話 「私の新しい生活 2」（後書き）

ほんっつと

毎度毎度駄文ですいません！！

次から学園編です！

そして今きずいたけど20話目だわ  
こんな馬鹿がここまで書けるとは・・・！！

## 第20話 「私の新しい生活 3」

「・・・着いたようだな。」

話をしている最中、ルートさんがつぶやいた。

「・・・では、改めて。

よつひりや、本田桜さん。

じいが、ワールド学園、通称W学園です。」

「・・・！」

そういうながらルートさんが車のドアを開いた。

ドアの先には、古い洋館のようなきれいな建物がいくつも見えた。正面にある一番大きい建物にはツタが張っていて、時代を感じさせていた。

「これが本部。

学校長室や生徒会室など学校生活になくてはならない場所が集まっている。」

他には、大ホール、倉庫、図書室、売店などがあるらしい。

「説明は、学校長に挨拶してからだな。」

そう言って二人が学校長室に連れて行ってくれた。

だが、学校長室の前で

「お前だけ行つてこい。」

「？ なんですか？」

「なんというか・・・いろんな意味で凄い人だから  
俺たちと一緒にだと大変なことになるからな・・・。」

@@@

「失礼します。転校生の本田桜です。」

「入つてくれるのである。」

セダ  
ンー！

「！」

「ああ・・・。すまないである。

お前の後ろに人影が見えたのでな。」

「そつ・・・。そだつたんですか・・・。」

「改めて、W学園へようこそであるー。」

そこにいたのは、学園長といつては若い銃を持った青年だった。

第20話 「私の新しい生活 3」（後書き）

口調でわかつちゃいますよね・・・。

第21話 「私の新しい生活」 4 (前書き)

## 第21話 「私の新しい生活 4」

がつ学園長先生……？ なわけないですよね……。

「紹介が遅れたな。この学園の学園長をしているバッシュ・ツヴィンクリである。」

あつ！ 学園長先生なんですね。  
まだ信じられませんけど……。

桜はそんなことを思つていて、

「よつじやである。たしか……本田桜だな？」

「はい！ 今日、この学園に転校してきた本田桜です！」

「似ている……。やはり兄妹ということか……。（ボソッ）

「はい？ 何か言いましたか？」

「いや……。

それより、ここがどんなところか知つていてるか？」

「いえ……。あまり……。」

「それでは、簡単に説明するのである。」

@@@

それから、バッシュ先生は『簡単に』と言つておきながらかなり話していた。  
要約するとこうだ。

・ これは、桜たちのよつじ【国】になつたものしか入学できない。

- ・退学、中退、卒業はない。
- ・つまり、一度入学したら出られない。（しかし、例外もある。）
- ・全寮制
- ・おこづかいが月に一度決まった金額出る。
- ・しかし、【上司】が出した【仕事】をするとおこづかいが増える。
- ・一人一人、【上司】がつく。
- ・ここに先生は、学園長先生と寮母の方しかいない。
- ・そのため、学園とつぐが授業がない。

@@@

「これで、一応生活に困らないだらう。」  
「あっ・・・ありがとうございました！」  
「あとは、他のものに聞くのである。」「  
はい。」「  
「それでは、お疲れである。  
どうせ、外で一人が待っているはずだから、早くいくのである。」「失礼します。  
(てか、二人共待つてくれてるんだ・・・)」

@@@

そう言つて学校長室から桜が出た後、

「やはり、【日本】になりかけている・・・。  
あの言葉づかいが取れなくなったり、小さこじみの記憶をなくし

ていぐのであるつな・・・。

しかし・・・、【日本】になるまでの期間が短すぎる・・・。  
やうが少し気になるな・・・。」

バッシュはやうつぶやいた。

## 第21話 「私の新しい生活 4」（後書き）

毎回のことながら短いし、筋が通つてないし・・・。  
これ、悪い例にしかなりませんよね・・・？

多分、次からキャラが増えます（笑）

## 第22話 「私の新しい生活 5」（前書き）

これ以外にも桜ちゃんの話を書きました。  
ここは桜ちゃんと全く別の性格の。

こんがらないよひこ気を付けます！！

第22話 「私の新しい生活」 5

ドアを開けると、一人がいた。

「だいぶ時間がかかつたな。」

「いいえ、先生のお詫びを聞くのです！」

「アーヴィング、待つて」

おりがヒノコモ。」

んあ、僕にあんなもん

そへ、いえは 学園の建物の説明がまたたこだな

「どうか分かるですか？」

「学園祭せんじゅういじ」などが苦手なんだ。

それは置いとして  
行くか!

こうして三人は本部を出た。

@@@

その後、三人は学園内では小さいほうに属するであろう、しかし一般の人を見たら金持ちだと思うであろう豪華な建物について

「世間でこいつ高校のようないじりだ。」  
「あは、高等部。」

「なんだ？ それ学園長から聞いたのか？」

「はい。」

「ケセセセ。

確かに授業はねえけど、試験があるからその前とか、あと、勉強熱心な奴らは仕事がないときに集まつて勉強するぞ。「そうなんですか。

「どうか、授業がないのにどうやって試験をするんですか?」「寮の自分の部屋になぜか参考書が大量にあるんだ。その中から試験範囲だけ掲示するような形であとは各自で勉強しろ、ということだ。」

「そう、なんですか。」

「そして、成績トップ10がおこずかいアップ、ワースト10ぐらいがおこずかいダウン、だつたはずだ。」

「なるほど!」

「あの、おこずかいって用いぐらなんですか?」

「大体、入学当初で高等部 1万、中等部 5千円 ぐらいだ。あとは、【仕事】の難易度にもよるが、月10回程度で5千円だな。」

成績上位を1回で2千円程度上がるな。

成績下位を1回で同じ程度下がる。」

「かなり高いですね。」

「ちなみに頑張つて月10万にしたやつが前、いたな。」

「1万をですか!?」

「いや・・・。たしかそいつは中等部だったから5千円から、だ。」

「なんですか、那人!?

もはや、すごいとしか言ひづがないです。」

第22話 「私の新しい生活 5」（後書き）

ビバ・W学園編ーー！

もつ、楽しすぞますよー。

第23話 「私の新しい生活 6」（前書き）

なんか あつちの話といひの話が混ざりあつてやうやう……。

## 第23話 「私の新しい生活 6」

その後、3人は高等部から10分ほど歩いたところにある寮を目指していた。

桜はその間にこの広さや整備された何十人が横に並んで歩いてもまだ余裕がありそうな歩道に驚いていた。

あちこち見そうしていた桜に気付いたらしくルートが声をかけた。

「……ん？ なんかあつたか？」

「いえ、ただ……。」

「ただ？」

「今までの私と住む世界が違うなあと。」

「確かに外の世界とは全く違うな。」

「ここは中世の【国】が誰にも気づかないように作られた場所らしいからな。」

「そうなんですか？」

「ああ。ここは一般人には気づかれないから攻撃されることもない。だから、【国】が自分たちの安全のために作った、と予想されているんだったよな？」

「兄さん、『よな？』ってここで生活して何年にもなるんだかもうちょっと確信を持つて言ってくれ。」

その言葉で桜はふと思つた。

「おー人は【国】になつて何年になるんですか？」  
「たしか俺も兄さんも13年ぐらい前にお呼びがかかつたよな。」「えっ！ じゃあ、すぐ小さっころから？」

「ああ。たしか俺様が7歳、ヴェストが5歳だつたはずだな。」「す、じい・・・。」

「ちなみにお前の兄さんは2歳ぐらいから【日本】だつたらしいがな。」

「つてことは・・・、私が生まれた後にはもつ・・・。」

「ああ。だから奴はすごい。」

俺らは【国】になつた後、兄弟以外拒絶していた。特に親に・・・。

『』にいるほとんどの【国】はそうだ。

『ああ、なんで親は自分をこんな目に合わせるんだ？』って家族を拒絶する癖がついていく。』

「昔、ひどいときには寮の自室に閉じこもつたり、自殺未遂を起したり、

他人に対して殺意を向けたりするやつもいたらしい。』

「そんな中にお前までいたらかわいそつだと思った奴はお前を養子に出した。』

実をいうと、奴もお前以外の家族は拒絶していた。自分とお前が

一番別れがつらくない時に『

「まあ、養子に出した後しばらく一人でさびしそうにしていたがな。』

』

桜は初めて兄を少し知れたような気がした。

そつか、お兄ちゃん一人でがんばつてたんだね。  
家族を拒絶していたんだね。

ありがとう。

私を拒絶しないでくれて。  
私を見捨てないでくれて。

そして、ごめんなさい。

今まで、ひどいこと言つて。

そんなになるまで一人でがんばってくれて。

そう思つた桜は自然と涙がこぼれていた。

## 第24話 「私の新しい生活 7」（前書き）

なんかもう一つのまゝにむこちあつていつかまつぱつてましたわ・。  
。

## 第24話 「私の新しい生活」

7

泣いている桜に一人が気づいた。

「どう…どうしたんだ？」

「いえ…何でもないです…」

「そうか？なんかあつたようにしか見えないんだが？」

「そつそれより早く寮行きましょう！今日のうちに荷物整理したいんで。」

「ああ…わかった。それと、学校では俺らは国名で呼び合っているんだ。」

「本名だと略じづらい奴や本名が長い奴がいて面倒だから、せっかくだから国名で呼び合おうって事になつていてるんだよ。」

「そうなんですか…。」

「……といふことは私の場合、【日本】って呼ばれるんですか！」

「まあ、そういうことだな。」

@@@

そんな会話をした後、桜たちは寮に向かつた。

その後、三人が付いた建物は小さな学校の校舎ほどの大きさしかなかつた。

「「」が寮だ。」

「まつ！」

一言で「うとう」というの学生全員が「ここに住んでる大きな俺らの家つてところだなー。」

「・・・。」

意外だつた。

ここまで見てきた建物はほとんど今までいたところでは考えにくくほど大きかつた。

しかし、寮だけは今までにも見たことがある大きさだつた。

「・・・意外です。」

「どうした?」

「いや・・・寮つていうので今まで見た建物より大きいのかと思つてたんだ。」

「確かにこの建物は小さいよな。」

まあ、全校生徒が少ないからこれだけで済むんだ。」

「へえ〜。」

「だけど、全員が集まれるホールも5つぐらいはあるし、一つ一つの部屋が大きいからここまで大きくなつたんだ。それらがなければ、ここまで大きくならない。」

「といつても、一つの部屋に2〜3人の相部屋だけどな。」

「相部屋としても一部屋が大きいけどな。」

「なるほど・・・。」

ちなみに私は誰と相部屋になるか知つてますか?」

「俺らもそこまでは知らない。」

たしか、アジアの奴はアジアで集まるはず・・・だつたよな、ヴァスト?」

「ああ。だから香港、台湾・・・辺りが妥当じゃないか?」

「あいつらか〜。」

「あの・・・香港も台湾も【国】ではないと思つのですが?」

「あの一人は特例で【国】じゃないけどここにいるんだ。」

その後、寮の部屋割りを聞いてびっくりした。  
相部屋に一人が言った通り香港と台湾になつたからだ。

第25話 「私の新しい生活 8」（前書き）

学校で何やってんだよーーー

ところ突っ込みはなしで（笑）

## 第25話 「私の新しい生活 8」

「ん・・・。」

5時だ。

桜が起きた時には2人とも起きていた。  
しかし、香港は散歩に行つてゐる為部屋にいるのは台湾と桜だけだ。

「あ・・・おはようござります。」

「おは三〜〜！」

「皆さん早起きですね！」

「一番早かつたのは日本さんだつたけどネ・・・。

日本さん・・・。どうして自殺なんか・・・。」

見ると台湾は泣いていた。

聞いたところ台湾は、日本が死んだ後から涙もろくなつたらしい。  
そして、今はそれを慰め担当が相部屋の香港と桜だ。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・「ではないですよね?」・・・はい。」

「台湾・・・また泣いてる的な?」

「香港さん、お帰りなさい。」

「ん・・・。台湾、悲しいのは分かるけど泣き過ぎ・・・。」

一度泣き始めたらなかなか泣き止まないので  
一人はその後、朝食までの間ソファーで横になつていた。

転校してきて2日目の朝にして早くも桜はくじけそうだった。

## 第25話 「私の新しい生活 8」（後書き）

学校でやっている為、ここにしなしか少ないですよね・・・。

あと、次回予告・・・らしきもの

「ここでは何をするの〜？」

「もう〜!さっき言いましたよね？ 次回予告をするんです！」

「それはそうと次何やるか知らないんですけど」「それなら大丈夫です

！」・・・あつや。」

「さつあと進めちゃいますね！」

次は今回の話の前夜話のお話です！

「それって作者のてぬく「そんなわけじゃないですよーーー！」

思つたんだけど俺が言つてる最中に日本、入りすぎ・・・。」

「すいません・・・。」

~~ end ~~

第26話 「私の新しい生活 9」（前書き）

やつとネット繋がりました！  
「迷惑おかげしました。」

## 第26話 「私の新しい生活 9」

前夜

「えつと、すず・・・本田 桜です。  
みなさんよろしくお願ひします。」

その日、桜達は寮監達のところへ挨拶に行つた。

寮監達は鍵を渡したり、諸注意を書いた紙を渡したりした。

「あとは、相部屋の人へ聞いたり、するといいよ。」

「はい！これからお世話になります。」

「・・・それにしても君が菊君の妹さんか。」

「たしかに雰囲気とか似ているね。」

「・・・。」

桜はそれに対して、何も言えず困った顔をしていた。

それに気が付いた寮監のうちの一人が場を濁すように

「とりあえずみんなとなかよく頑張りなさい。」といった。

@@@

寮監室から出た桜とルート達はそこで別れ、桜は自分の部屋へと向かつた。

アジア組は2階なので階段を上つた。

先ほど渡された鍵には『204号室』と書いてあった。

自分の部屋を探し、入ると二人いた。

一人は一つに編んだ三つ編みを垂らして泣いている少女、

もう一人はそれを慰めていた。

「あの・・・204号室はここですか？」

桜が問うと一人は桜を見た。

「誰？」

「えっと、今田から転校することになった・・・本田桜です。よろしくお願ひします。」

「話は聞いてたけどここのは部屋だつたんだ・・・。  
えつと・・・私は台湾・・・よろしく・・・。」

「・・・日本だけ?・・・俺は香港。」

「この部屋大変だけど頑張れ的な?」  
「これからよろしくお願ひします!」

「日本の・・・箪笥とベッドはこっちだけど入らない時は私のところに置くといいね・・・。」

「あつありがとうござります!」

## 第26話 「私の新しい生活 9」（後書き）

ああああああ台湾の口調（？）がわからんない……。  
しかも香港と、ギリシャが「ひちゅうかや」と……。（泣）  
しかも、かなり中途半端！

みなさん、久々だからと温かい田で見てください。

## 第27話 「真実を知りたかった」（前編）

えつとサブタイで気づいたと思こますが章の中での小町章が新しくなります！

前回の小さい章が中途半端な理由は聞かないでください（泣）

でもちやんと新章になつたところと

キャラはかなり増える（予定・・・）

## 第27話 「眞実を知らされた国 1」

8時だ。

「おはようございます、香港さん・台湾さん・」

学園に入学してから1週間がたつた。  
その間はなんの変化もなく、日本はただ台湾と香港と話をして過ごしていたため部屋から出ることはほぼなかつた。その間に桜は【日本】と呼ばれることになれた。本名が【本田 桜】になったこともしっかり理解し、自分が【鈴木 桜】であつたことも遠い過去の記憶とともに消えかけていた。

「遅い的な？」

「でも時間がたくさんあるんだし別に大丈夫ネ！」

「けれどかなり遅いですね・・・これからは気を付けます！」

変化があつたのは日本だけではない。台湾も泣くことがほぼ無くなつた。そして2人とも【本田 菊】が死んでから落ち着きのなかつたが？？？香港はそもそも見えなかつたが？？？かなり正常に戻りつつあつた。さらに今は日本が早くなれるようになると午前中は【日本】、午後は【本田】と呼んだ。【本田】はまだしも【日本】と呼ぶと最初は違和感があつたがそれすらも感じなくなつた。日本がその呼び方をされてすぐ反応するよつになつたのは2日後だったが・・・。

「あつ！」

「日本、なんかあつた的な？」

「今日つてテスト範囲が貼られる日じゃないですかーー！」

「やつしょばそそうネ！」

「どこに貼られるんでしたつけ？」

「たしか高等部の門にある掲示ば・・・。」

「それじゃ行つてきます！――」

「あ・・・。」

そう言つて桜はすぐ着替えて出かけた。

@@@

「あつ！ル・・・、ドイツさん！」

「ああ、日本か。これを見に来たのか？」

「はい！・・・、といつかじゅうで中等部と高等部しかないんですか

？」

「一応大学のよつなといふはあるが、そひに行つても内容以外まつたく変わらぬ。」

やじが終ると上司からの仕事が半端なく来るらしいな・・・。」

「やうなんですか――・・・、といつかドイツさんつて高等部だつたんですか！？」

「ああ、一応お前とは一つ違つた。」

そこまで聞いて驚く間もなく日本はある人物に抱きつかれた。

## 第27話 「真実を知りたかった国 1」（後書き）

書き方が違うのは気にしないでください。  
読みづらかったら元に戻すので言いつけてください！

最後の人物って誰でしょうね（笑）

ちなみにドイツでもパーでもないですよ？

（そんなことやつたらあんまり作者はうれしいけど）

第27話 「真実を知りされた国 2」（前書き）

お久です！

## 第27話 「眞実を知らされた国 2」

びっくりした日本の目に飛び込んできたのは茶髪の青年だった。

「はじめまして！俺、フェリシアーノ・ヴァルガス・イタリアだよ！」

「君かわいいね！どこから来たの？」

「こら、イタリア。いきなりナンパするな！」

「ヴェ・・・。」

「えつと、どうもイタリアさん。私、日本と言います。」

「えつ！じゃあ、君が菊の妹さんなんだね～！菊にそっくりだね！」

そう言われた日本は困ってしまった。

兄といわれても名前も顔も性格も何も知らないのだから当然だろうが。

「菊はね、ずっと俺たちと一緒にいたんだ。

だから菊のことを一番理解していると思ってたのに・・・。」

「イタリアさん・・・。！！」

その時、日本はぐらついた。

「大丈夫か！？」

「・・・大丈夫です。ちょっと疲れているみたいなので寮に戻ります。」「そりが・・・。」

そう言って、その日3人は別れた。

@@@

日本が帰ってきたとき、台湾と香港は漫画について熱く語っていた。

「あつ！日本、どうしたの！？」

「かなり顔色悪い的な？」

「大丈夫です。ちょっと疲れているみたいなので横になっています。」

「・・・」「

そう言ってベッドに潜り込んだ日本は次の日の夕方まで目を覚まさなかつた。

第27話 「真実を知りされた国 2」（後書き）

フェリ初登場！

ここまで出てこなかつたことが間違いだと思ひけれどね。

第28話 「真実を知りたかった国 3」（前編）

一ヶ月ぶりぐらいですね？

その割に長くないけど・・・（笑）

今回は桜が眠り始めた日の次の日のお面頃です。

第28話 「眞実を知りた國 3」

丸一日寝てゐる桜がさすがに心配になつてきた。江湾と香港は話していた。

「あれから丸一日以上寝てるなんて体調悪いのかな?」

「俺が思うに記憶が飛び込んで来た的な?」

「……でも、桜は日本になつてからまだ日が……。」

やつままで江湾が言つとチャイムが鳴つた。

「すまん。日本はいるか?」

そうこつて入つてきたのはドイツだった。

昨日の日本の様子がおかしかつたので会いに来たらし。

「日本は昨日帰つてきてから寝てる的な。」

「でも、昨日帰つたのはお昼にもなつてなかつたはずだぞ?」

「その後から起きてこないんだよ」

「で、記憶が飛び込んできたんじゃないかつて話し合つてた的な。」

「・・・俺がドイツになつたときは1ヶ月くらいで

そうなつて少し早いんじやないかつて学園長は言つていたぞ?

それから考えるにまだ2週間も経つてない・・・。」

「だからもししかすると、菊は・・・。」

そこまで香港が言つと隣の部屋とつながつてゐるドアが開いた。

「おはようござります。あー、ドイツさんもいらっしゃったんですね?」

?  
』

そう言って今まで噂されていた本人が起きてきた。

第28話 「真実を知りされた国 3」（後書き）

そういえばドイツの年齢がかなり矛盾していたので直しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4305t/>

---

私、日本ちゃんになりました！！

2011年10月10日12時24分発行